25th Anniversary

CITIZEN OF THE YEAR 2014

社会に感動を与える人々を
応援します

Contents

4 原田 燎太郎さん
尊敬と信頼が生まれるとき
人と人はつながれる

8 本間 錦一さん
海の厳しさ優しさを愛し
人命をまもり続ける

12 阪井 ひとみさん
心安らぐ住まいが
自分らしく生きる力に

16 対 談
シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長 山根 基世さん & 2014年度受賞者 阪井 ひとみさん

20 グループ社員100名が選んだ シチズン特別賞

22 シチズン特別賞 高山 良二さん
共に暮らし、共に喜び
平和の種を育てたい

26 歴代受賞者一覧

各受賞者へ贈る書

書道家 武田双雲

昭和50年熊本市生まれ
3歳から母である書家:武田双葉(そうよう)に書を叩き込まれる。東京理科大学理工学部卒、NTTに約3年勤めた後、2001年1月より書道家として湘南で創作活動をはじめる。代表作品に「人生」「戦」「種」「波」などがある。

CITIZEN OF THE YEAR 2014

誰かを幸せにしようとする人こそ世の中の宝。賞をさし上げる私たちも幸せです。

シチズン・オブ・ザ・イヤー
選考委員長
山根 基世

毎年、12月のクリスマス前後に、受賞候補者の資料が届きます。クリスマスプレゼントを待つように、私はその日を楽しみにしています。選考は、とても難しく、毎回悩みますが、それでも資料を読むと、こんなにも志高く生きている人たちがいるのだと、励まされ、明るい気持ちになれるからです。

そして、表彰式での受賞者のスピーチを聞くと、誰かを幸せにするために、自分のいる場所でできる精一杯の活動を続けていらっしゃる方が多く、その姿に感動せずにいられません。延暦寺でみかけた額には「一隅を照らすもの此即ち国宝なり」とありました。誰かを幸せにしようとする人こそ、世の中の宝。

そういう方を応援できるこの賞は、さし上げる側をも幸せにしてくれます。

人々に感動を与えるひたむきで心温まる活動を顕彰して25年。私たちは、これからもずっと応援してまいります。

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、創立60周年に際し、社名の「CITIZEN(市民)」にふさわしい記念事業をとの思いから、1990年に創設されました。以来25年、「シチズンがある限り継続していく」という揺るがぬ信念のもと、今日まで歴史を刻んできました。

毎年、受賞者の方々の人を思いやる優しさ、ひたむきで心温まる活動に触れるたび、多くの元気や勇気をいただいています。私たちが顕彰させていただくことに喜びと誇りを感じるのは、その地道な活動の一つひとつが、人々の笑顔をつくり、大きな力となって社会を支えているのを実感するからです。

賞創設25周年を迎える今年度は、本賞3名に加え、シチズン社員が選ぶ「シチズン特別賞」を選出しました。

私たちは、これからも「市民に愛され、市民に貢献する」企業理念のもと、市民社会の一員として、市民の皆様の良き活動を応援してまいります。

シチズンホールディングス株式会社
代表取締役社長
戸倉 敏夫

2014年度 選考委員会

● 委員長	山根 基世	元NHKアナウンス室長
● 委員	香山 リカ	精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授
	角田 克	朝日新聞社 社会部長
	益子 直美	スポーツコメンテーター
	三笠 博志	産経新聞社 社会部長
	八木谷 勝美	日本経済新聞社 社会部長
	山腰 高士	読売新聞社 社会部長
	山本 修司	毎日新聞社 社会部長

敬称略・五十音順
※役職は、2015年1月現在

シチズン・オブ・ザ・イヤー とは

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰しています。毎年、1〜12月までに発行された主要日刊紙のなかから、賞にふさわしい記事を選び、主要新聞の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

今年度は、賞創設25周年を記念して、シチズン社員が選ぶ「シチズン特別賞」を設けました。「シチズン特別賞」は、グループ会社社員の中から選抜した社内選考委員100名による投票により、1名を選出しました。

原田 燎太郎さん

尊敬と信頼が生まれるとき 人と人はつながれる

中国でハンセン病快復者を支援していた原田燎太郎さんが、地元の大学で参加者を募ったとき
一人の学生だけが残ってくれました。しかし、現地に着いても偏見からか元患者に手を触れようともしません。
ところが、一人の年老いた女性が最期を迎えようとしたとき、
彼は指が短くなった彼女の手をそっと握りしめたのです。

人生の師と仰ぐ元患者との出会いが活動の原点

原田燎太郎さんが、初めて中国のハンセン病元患者が住む「快復村」でワークキャンプに参加したのは2002年、大学3年生のとき。それは、ボランティアの学生たちが道路や水道の整備、トイレの設置などを行いながら元患者の「快復者」と交流するものでした。

まだ有効な治療法がなく体に変形を起こすこともあったハンセン病患者に対し、中国政府は1957年に隔離政策を打ち出し、人里離れた「隔離村」800カ所に集めました。1986年に隔離政策が撤廃された後も、元患者の多くは差別を恐れたり帰る場所がないため村にとどまり、今も約600カ所で約2万人が過酷な生活を強いられています。

ワークキャンプからの帰国後、就職活動がうまくいかず、自分の進むべき道に思い悩んでいた原田さんは、自分にできることがあるのではと、再び中国を訪れます。そこは、広東省の広州市から車で7時間かかるリンホウ（嶺后）村でした。原田さんはこの村で、活動の原点であり人生の師とも仰ぐ、蘇振権（ソウチンクワン）さんと出会ったのです。

ワークキャンプのある夕暮れ、外を歩いていた原田さんは家の前でお酒を飲む蘇さんに出会い、誘われるまま盃を酌み交わしました。筆談で「あんたはハンセン病病人を怖がらないのか。感激だ」という蘇さんに、原田さんが「あなたは病人ではありません。快復者です」と答えると、蘇さんはうれしそうに天を仰いで笑ったそうです。「いじめられっ子だった僕は、人の目ばかり気にして、自分をさらけ出すことができませんでした。それなのに蘇さんは、歩けないほど重い後遺症があっても、昔の辛いことや曲がった指のことも笑みをたたえながら全部話されるんです。その姿を見たとき、なんて自分はちっぽけなんだろうと思いました。そのときの感覚が僕が活動を続けてきた原点なのです」

眼の見えないアジェさんからも多くのことを学ぶ

1960年代に建てられ、修理されていない家屋が多く、ワークキャンプでは水道やトイレなどを設置する

原田さんの呼びかけに初めて応じたマークさん（左端）をきっかけに、多くの中国人学生が参加するように

村人への恩返しのため、無心で走り続けてきた10年

ワークキャンプを自分たちの活動だと思い始めた中国の学生たち

蘇さんは、不自由な体で竹かごを編んだり料理を作って原田さんたちをもてなしてくれました。「こんなにも自分たちによくしてくれて、大切なことを教えてくれる村の人たちが実家に帰ることができないのは、どうしても理解できなかったんです」。原田さんは快復村でのワークキャンプが中国の学生で組織できるようになり、彼らが村に来る流れができれば、いずれ家族も会いに訪れるのではないかと考えたそうです。

そこで地元の大学に行き参加者を募ると、話を聞いた学生のうちマークさんが一人だけ残ってくれました。しかし、村に来た彼は、偏見からか決して元患者に触れようとしません。ところがワークキャンプ最終日、原田さん

地元の大学でワークキャンプへの参加を呼び掛ける原田さん

原田さんが人としての生き方の多くを学び、人生の師と仰ぐ蘇振権さん

原田 燎太郎さんによせて

ご両親は、原田さんの名前に「炎を広げていく」という意味の「燎」の字を付けられました。
まさにその名のとおり、燃え盛るような情熱を持って中国で活動をされています。
そして、その情熱の炎は今どんどん広がりをみせており、この一字が原田さんを最も表していると思いました。

武田 双雲

原田 燎太郎さん
はらだ りょうたろう
1978（昭和53）年生まれ
中国・広東省広州市在住

ワークキャンプを支えるJIA事務局での
原田さんとスタッフの菅野さん

に対する差別、偏見を変えていくことも大切な目的です。このため原田さんは、その第一歩として快復村の周辺にある小学校でのワークキャンプを始めています。また、現在寄付だけに頼っている活動資金について、収入を得られる方法の検討も進めています。

今後は快復村や村人の記録を残すことや、活動をアジアの周辺国に広げることにも注力していきたいという原田さん。ハンセン病が「社会問題」としてではなく、「社会の財産」として認められるよう取り組んでいきたいと熱く語ります。

学生が訪れた快復村では学生たちと元患者の笑いが絶えません

2004年8月、広州市にNGO「JIA ―家―」を設立

ハンセン病を「社会問題」ではなく「社会の財産」に

と交流があった年老いた女性が最期を迎えようとしたとき、手を握り涙を流す原田さんを見て、彼は病気で指が短くなった彼女の手をそっと握りしめたのです。

「中国の学生でワークキャンプができるようになる！」その光景を見た原田さんはそう思いました。

帰国後、原田さんに届いた手紙には、「キャンプ最終日のことは忘れない。彼女の手を君が握ったとき、君の涙を見たとき、人を愛することを教えてもらった。〝僕たちのワークキャンプ〟に参加する人をどんどん増やそう」と思いがつづられていました。

活動の進展とともに、
快復村を訪れる家族も見え始めました

こうして原田さんは、2003年、大学卒業と同時にリンホウ村に戻り住み始めたのです。

原田さんが村人に支えられながら中国の学生を募るうち、次第にワークキャンプに参加する中国の学生が増え始めました。当時の様子を原田さんは、「僕も現地の学生も、ものすごく猪突〝盲〟進で、あの村に水道がないというと数10時間かけて行き、いつの間にか活動は3省にまたがっていました」と話します。

活動の進展とともに、地元の病院が村人の体を診てくれたり、村を訪れる家族が出てくるようになりました。そして原田さんたちは、情報や人材、資金を管理しなければ質の高い活動が維持できないと考え、2004年、広州市にNGO「JIA ―家―」を設立したのです。

キャンパーとして活動している中国の
熱い学生たち（上）
快復村を訪れた中学生が元患者との
別れに涙する場面も（下）

中国の学生が急速に増えた理由について原田さんは、「村人が学生たちをとても喜んで迎えてくれますし、なにより、彼ら自身がこの活動は自分たちの活動なんだと思い始めたことが大きいと思います」と話します。

差別や偏見をなくし、活動をアジア各国に広げたい

20～25名の学生ボランティアが快復村で活動するワークキャンプは、年間100回程度行われ、これまで中国華南5省の61カ所で延べ1万3千人以上が参加しています。初めは村人を助ける側として参加していた学生たちも、次第に〝私とあなた〟という関係になり、村人が生きるなかで磨いてきた強さを見て、尊敬の念を抱くようになるそうです。

「1年のつもりで来て、あっという間に10年が経ちました」という原田さんは、活動の原動力について、小さな自分を受け止めてくれた蘇振権さんたちへの恩返しのような思いが大きいと話します。ワークキャンプは交流や生活改善だけでなく、ハンセン病や元患者

講演会や国際会議、ミーティングなどで
積極的に情報を発信

本間 錦一さん

海の厳しさ優しさを愛し 人命をまもり続ける

「こんな悲しい事故は、二度と起こしてはいけない」
1948年、本間錦一さんの地元で小学生が川で溺れ、
捜索にあたった青年団長も亡くなるという痛ましい水難事故が起きました。
本間さんが水中から団長を引き上げると、若い女性が駆け寄って泣き崩れました。
2人は1週間後に結婚式を控えていたのです。
このとき本間さんは、人生を水難救助に尽くそうと決意したのです。

痛ましい事故をきっかけに、水難救助団体を結成

新潟県の最北端、村上市にある瀬波温泉海水浴場で、毎年海水浴客の安全を見守り続けて今年41回目の夏を迎えるライフセーバーがいます。本間錦一さん88歳。とてもその年齢とは思えない引き締まった体は、日ごろの鍛錬の成果でもあります。

少年時代から泳ぎが得意で海や川で遊んでいた本間さんは、家業の玩具卸売業を継いだあとも暇を見つけては海や川に潜りに行っていました。そんな本間さんに、その後の人生を変える悲しい出来事が起こります。

1948年、21歳のとき、地元を流れる三面川で小学生の男児が溺れて流され、捜索にあたった青年団の団長も行方不明になってしまったのです。翌日、2人とも水中で発見され、依頼を受けた本間さんが川底から団長を引き上げると、若い女性が駆け寄って泣き崩れました。なんと、2人は1週間後に結婚式を控えていたのです。あまりにも痛ましい光景を目の当たりにした本間さんは、「こんな悲しい水難事故をこれ以上起こしてはいけない。これからの人生は水難救助に尽くそう」と誓いました。

その後、本間さんは海や川で何度も水難救助をするようになり、少年時代からの「素潜りのきんちゃん」の名は地元で知られるようになりました。またその一方では、「生活の糧としても素潜りの技術を活かし、地元の漁業組合長から許可をもらって、真冬でもふんどし1本で鮭を獲っていました」と笑顔を見せます。

こうして、村上市のあらゆる海岸や川で潜水の技術、知識を培った本間さんは、1956年、念願だった水難救助団体「村上潜水クラブ」を7人の仲間と結成したのです。

40年間、海水浴客の安全を見守ってきた瀬波の海岸に立つ本間さん

信念を持って、水難救助の道を歩み始める

ライフセーバーに必要なのは「実力と実績」

ボランティアで水難救助団体を結成した本間さんは、自身の経験や知識を仲間に教え込み、警察や消防隊から連絡が入ると、ダムや川、海岸の現場に急行しました。

昭和40年代の始め、本間さんに悔やまれる出来事が起こります。「三面ダムの工事現場で滑落した作業員の遺体の引き上げを頼まれ、12メートルの深さまで潜ったとき鼓膜を破ってしまいました。今でも、右の耳は全然聞こえないのです。私も未熟でした」と本間さんは振り返ります。

高度経済成長のなか、レジャーに出かける人が増え、瀬波にも海水浴客が多く訪れるようになりました。このため水難事故も増え始め、「心配になった私は、監視員がどんな救難訓練をしているのか見に行きました。驚いたことに、溺れた人を救う潜水訓練ではなく、地上で応急処置訓練ばかりしていたのです」。昭和49年、その危惧が現実のものとなります。「ひと夏で3人も犠牲者が出たのです。そのうちの1人は、監視員の目の前で沈んでいったのですが、潜水技術がないため、なす術なく引き返してきたのです」

危機感を募らせた市は、数多くの水難救助を行い海も川も知り尽くしている本間さんのもとを訪れ、監視員になってくれるよう頼みました。人命救助に使命感を持っていた本間さんは、救助に必要な潜水用具をそろえることを条件に引き受けました。「何の資格もない者を入れた」という声もあったそうですが、「監視員となった2年目に25m沖合で溺れ沈んだ大学生を水中から引き上げ、心臓マッサージと人工呼吸で心肺停止状態から蘇生させました。それからは何も言われなくなりました。ライフセーバーに必要なのは、潜水技術を基本とした人を助ける実力と実績なのです」

仲間とともに、水難救助の表彰を受けることも度々ありました

冬の三面川で鮭を獲る20代前半の本間さん。村上市内のイヨボヤ会館に飾られています。（イヨボヤとは「鮭」の意味）

「人命は地球より重い」を隊員と共に実践

経験と知識を活かし「100歳まで現役」

これまでに育てあげた隊員は120人にのぼります

村上市水難救助隊長としてこれまで約50人を救助し、そのうち4人は心肺停止状態から蘇生させた本間錦一さん。「絶対に助けるんだという思いで人工呼吸や心臓マッサージを続け、口から海水が吐き出され、胸に耳をあてて心臓が動き出した音を聞いたときのうれしさは、もう本当に涙が出ます。神様が鐘を鳴らしたような音なんです」

溺れた人だけではありません。熱中症で倒れた人を助けたり、毒虫やクラゲに刺された人の治療法を医師に助言したりと、本間さんの人助けは枚挙に暇がありません。

監視所に掲げた本間さん直筆の教訓（左は村上市観光協会の浅野謙一会長）

オフシーズンも、定期的に自宅から海岸の監視所まで自転車で通います

ライフセーバーを「これほど尊い仕事はない」という本間さんは、毎年、海水浴シーズンを前に自分に3つの試練を課しています。1つ目は、「自転車で自宅から海岸の監視所まで5キロを16分以内で走る」。2つ目が「途中の坂を立ちこぎせず、息切れしないで登る」。3つ目が「30メートル沖の消波ブロックまで息継ぎなしで泳ぐ」です。「泳ぎでは若い人に負けるようになりましたが、潜るほうでは絶対に負けません」と、今年も難なくクリアできそうです。

毎年10万人以上が訪れる瀬波温泉海水浴場のシーズンは、7月15日から8月20日まで。海開きの朝には本間隊長以下、隊員がそろって安全旗を掲揚し、敬礼をして無事故を誓います。毎日隊員に「人命は地球より重い」と教え込み、監視所のなかには直筆の教訓、「鋭敏なる感覚」「適切な判断」「迅速な行動」を掲げています。

毎年、7月15日～8月20日まで掲げられる安全旗

本間さんが育てた隊員は120人を超え、救急救命士になった教え子もいます。シーズン中には、遠く千葉県や愛知県などからも応援に駆けつけてくれるそうです。

監視員になって41年、本間さんは監視日誌を1日も欠かさず、天候から潮の流れ、水温、発生した事故まですべて記録しています。どんな日に事故が起きたかひと目で分かる監視所の財産です。

今年も間もなく海水浴シーズンを迎える本間さんは、「健康を支えてくれている妻や家族に感謝し、これからも体に気をつけて100歳まで現役で頑張ります」と、笑顔を見せます。

1日も欠かさず記録している「監視日誌」

本間 錦一さんによせて

「錦」を選ばせていただきました。この字しかありませんでした。「錦（にしき）」は、美しいもの、立派なものにたとえられますが、
本間さんは長年人命を守り、故郷だけでなくいろいろな所に錦を飾ってこられています。
そんな生き方に尊敬を込めて、お名前の一字でもある「錦」を書かせていただきました。

武田 双雲

本間 錦一さん
ほんま きんいち
1927（昭和2）年生まれ
新潟県在住

阪井 ひとみさん

心安らぐ住まいが自分らしく生きる力に

「えっ！ 本当にここに住んでいるんですか！」
精神障害の人が暮らす部屋を見た阪井さんは、驚きとともに激しい憤りを覚えました。
同じ人なのに、廃墟のような部屋に住まわされ、平気で相場以上の家賃を取る人たちがいる。
何とか普通の住まいを提供しようと決意した阪井さんの前に立ちふさがったのは、
精神障害に対する差別と偏見という大きな壁でした。

きっかけは、精神を病んでしまった入居者からの電話

「誰かが俺を殺そうとしている！」。今から19年前、入居者の男性から電話を受け阪井さんはすぐにアパートへ駆けつけました。男性は錯乱状態で妄想に苦しんでいました。家族に連絡すると、関わりたくないと冷たく言い放ち取り合いません。仕方なく阪井さんが病院を探してたどり着いたのが、精神科の病院でした。

医師の診断は「統合失調症」。男性は離婚をきっかけに、心の病気になっていたのです。

このことをきっかけに病院へ通うことになった阪井さんは、それから数カ月後、病院から「同じような患者さんがたくさんいて、退院後の入居先で困っているのです」と相談を受けました。話を聞くと、家族に見放されて退院後の入居先が見つからないため、50年も入院している患者がいるといいます。たとえ部屋が見つかっても、家主は「貸してやっている」という態度で、壊れたトイレやお風呂、台所をまったく修繕しなかったり、畳や壁がボロボロでネズミが巣くっているのに精神障害者だからと家賃に上乗せして貸し出す大家…。阪井さんは驚くと同時に激しい憤りを覚えました。

「それなら、私が入居を支援しよう」。そう決意したのです。

「サクラソウ」敷地内の作業所だった場所を利用し、入居者たちが交代で店長を務めて貴重な交流の場となっているカフェ「ノア」

精神障害の人など約50人が入居する「サクラソウ」（左）
「サクラソウ」の敷地内にある「Cafeノア」（右）

偏見は根強く、自分が管理するアパートに受け入れ

入居支援を始めてみると、精神障害の方に対し想像以上に根強い差別や偏見がありました。同業者や家主に協力を求めても、「あんたが好きでやっとるんだから」「精神障害者にはこの地域で生活してほしくない」と突き放されます。

何度も壁にぶつかりながら、阪井さんは自ら保証人になったり、自分の管理するアパートに受け入れたりして入居支援を続けました。そんな姿に理解者や協力者も次第に増え、支援対象も精神障害の人だけでなく、刑務所を出所した人や親から虐待を受けた若者、長年のホームレス生活で体を壊した人など、さまざまに広がりました。「家がないため何度も刑務所に入っていた男性が、自分の住まいを持ってからは一度も罪を犯さなくなりました」と阪井さんは話します。

「サクラソウ」に貼られた阪井さん作の「挫折禁止」のポスター

精神障害者が住まわされていた想像を絶する劣悪な部屋

支援のネットワークを広げ、入居者を安心で包み込む

しかしながら、不動産業者ができることに限界を感じていた阪井さんに、大きな出会いが訪れます。同じように精神科の長期入院問題に取り組んでいた井上雅雄弁護士と知り合い、ネットワークが大きな広がりを見せることになったのです。それが、翌２００９年に不動産業者、弁護士、医師、看護師、社会福祉士、社会労務士、さらに行政も連携したＮＰＯ法人「おかやま入居支援センター」の立ち上げでした。

「知的障害がある人のお金を管理する人や、食生活の管理が必要な人をサポートする人、デイサービスや通院のアドバイスをする人など、法律や福祉、医療などの専門家がサポートすることで、支援している人たちを安心で包み込むことができるのです」

皆で支えることで、「一人ひとりが、自分らしく生きてもらえたら本当にうれしい」と、阪井さんは日々の活動に思いを込めます。

行政の目がゆき届かなく、足が悪いのに2階に住まわされている人も（上）
地域の用水路を掃除するサクラソウ入居者たち（下）

心に病気があっても、自分の意思で働き自由に暮らせる環境に

住まいを必要とする人のため、次の一歩を踏み出す入居者たち

生活の基本は「住」だと阪井さんは言います。「住むところが安定すると、次は掃除や洗濯をしはじめ、食事を作ったり毎日お風呂に入ったり、一つずつできるようになって、働くことを考えるようになります」

阪井さんが、入居支援しているマンションの一つ「サクラソウ」に姿を見せると、入居者たちが待ちかねたように笑顔で話しかけてきます。ここには、約50人が住んでいます。「サクラソウ」では、入居者同士がお互いの話や悩みを聞いて支え合い、誰かに幻聴などが現れると入居者が気付いて連絡をし、早めに対処できるそうです。

毎日のように「サクラソウ」を訪れる阪井さん

ネットワークがさらに広がるきっかけとなった井上雅雄弁護士と

精神障害への理解を深めてもらうため、全国で講演を行っている

また、入居者はここで生活を整えると、住まいが必要な次の人のため転居していくことが少なくないといいます。「住む場所が見つからない辛さは自分たちが一番よく知っているので、困っている人を助けたい思いが強いのです。最近も若い男の子が結婚することになり、ここを出て新しい一歩を踏み出すことになりました。私はこの場所が、皆が自立するための通過点でいいと思っているんです」と阪井さんはうれしそうに話します。

そして、日本人が大切にしてきた他人への思いやりの心を、むしろ心の病気で苦労してきた彼らから強く感じると言います。

心の病気に理解が深まり、それぞれが自分らしく働ける社会に

心の病気は、決して恥ずかしいことや特別なことではないという信念で、阪井さんはその理解を深めてもらうため全国で講演を行っています。

また、精神障害の人たちが歴史的にどんな生活をし、どういう治療を受け、社会がどう対応してきたかなどを紹介する資料館を今春開設しました。海外の事情にも目を向け、精神病院を廃して地域で暮らせるように取り組んでいるイタリアの事例も紹介しています。

精神障害について、さまざまな角度から紹介するため開設した資料館の展示物

そして今、阪井さんは精神障害の人たちが働ける「会社」づくりにも力を注いでいます。「入居者に聞くと、多くの人が会社で働きたいと言うんですね。一般の人と同じように社会保険の保険証をもらうことは涙が出るほどうれしいことなのです。その人らしく生きることは、その人らしく働けるようにすることだと思うので、一人でも多くの入居者にそれを実感してもらいたいのです」

入居支援から自立支援へ。そして、将来に不安を持つ入居者本人や家族に深い安心が提供できるような支援を目指し、阪井さんの取り組みはこれからも続きます。

阪井 ひとみさんによせて

阪井さんは、「衣食住」の「住」が変われば「衣食」が変わるとおっしゃいます。
「環境」は本当に大切なんだなと実感します。そして、さまざまな壁にぶつかりながらも、「環境」を作り、
一つひとつ支援活動の「環」を広げ、多くの人に幸せな笑顔の「環」が広がっていくイメージを、書で表現しました。

武田 双雲

阪井 ひとみさん
さかい ひとみ
1959(昭和34)年生まれ
岡山県在住

誰もがこころに育てたい 信念をつらぬく勇気と人間愛

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長の山根基世さんが、2014年度受賞者の阪井ひとみさんを迎え、活動を続けてこられた原動力や皆が心を開いて慕う人間力の原点などをお聞きしました。

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長
山根 基世さん

NHKアナウンサーとして数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンス室長に就任。NHK退職後、子どもの言葉を育てる活動に取り組んでいる

2014年度受賞者
阪井 ひとみさん

自然に身に付いた差別や偏見のない心

山根　阪井さんが、精神障害の方やホームレスの方に差別や偏見なく接することができるのはどうしてでしょう。

阪井　子どものころ、知的障害がある方が地域の一員として普通に生活していて、自然に交流があったからかもしれません。日中、神社で過ごしているので「天神さん」と呼ばれていたおじさんがいて、祖母が煮物などを作ったときに、一人分を小鉢にいれてよく持っていきました。そのおじさんも、小鉢を返すときに野菜を入れてくれたりして。

山根　感謝の気持ちを野菜に込めて、器を返してくださったのね。昔は、そんな風に地域につながりがあり皆で支えていました。だから阪井さんも自然体で接することができるんですね。子どものころ、お父さま、お母さまはどんな教育方針だったのでしょう。

阪井　ほったらかしでした(笑)。ただ、裕福ではなかったので、両親が一生懸命働いている姿はいつも見ていました。父は中学を卒業して高校に合格したのですが、家のことを考え、1カ月くらいで学校をやめて働き出したそうです。

山根　そういうお父さまの姿から、阪井さんが感じられたり学ばれたのは、どんなことでしょうか。

阪井　特に意識したことはありませんが、父がよく言っていたのは、「50歳になったら人にかえせ」ということと、「人に何かしてあげても、見返りは考えるな」という言葉ですね。私は50歳より早く活動を始めましたが。

罪を犯した若い世代に働く価値を伝える

山根　阪井さんは、刑務所や施設から出所した若い人たちの面倒もみていらっしゃいます。そうした人たちに、ご自分の管理する物件の草抜きをさせていると聞きました。それはどういう狙いなんですか。

阪井　草抜きって、簡単そうでとても頭を使う仕事なんです。それで、私の説明を適当に聞いてササッと上のほうだけ刈った子のところはまたすぐに生えてきちゃう。でも、根っこから抜いて土もきれいに落としていった子のところは、しばらく生えてきません。結局、いい加減に済ませたところは結果もそれなりで、人生だって同じなんだと分かってほしいのです。

山根　やはり、汗水流して一生懸命働くことの価値や喜びを知らない子が多くなってきているんですね。阪井さんはそれから、ホームレスの方を支援するため、ひと月1万円で部屋をお貸しになっていますね。

阪井　彼らは生活保護を受けず、空き缶を集めてひと月5万円くらい稼ぐんです。それで、1日1000円の生活だと月に3万円かかって、残りの2万円のうち水道光熱費を考えると家賃1万円なら何とかやっていける。それで、「ほんまに家いらんの？」って聞いたんです。そうしたら「そんなわけなかろうが。俺も凍死したくないわ」と。それで部屋を探したら、5年くらい空家になっている下宿屋があって、大家のおばあちゃんに「ホームレスを支援するので貸して」って言ったら、案の定、断られました（笑）。

山根　でも、あきらめずにずいぶん通ったそうですね。阪井さんにとっては、ホームレスの方が困っているのも他人ごとじゃないんですね。

阪井　だって命ですから。どんな人も生かされるために生まれてきたんだと私は思うんです。

山根　それで、何十回断られても通い続けて、最後は仲良しになって貸してもらうのですよね。

阪井　「また来ました」って、もうお友達ですよね。そんな風に通って、昔はみんな暮らしが大変だったよねえなんて話をすると、おばあちゃんもだんだん自分の思いを話してくれるじゃないですか。

山根　阪井さんの人間力ってそういうところなのですよね。今の若い人って世間話をしながら人間関係を築いたりできないでしょう。そうして18部屋を一括で借りて、しかも、全部の部屋に給湯器とエアコンをつけた。そのお金はどうしたのですか？

阪井　弁護士の先生に頼んで、「遺言や相続の相談受けます」という看板を出してもらって、その広告料でローンを組んだのです。

どんな人も生かされるために生まれてきたんだと私は思うんです

同じ命だという憤りが全力で走り続ける原動力に

山根　ホームレスの方たちは、その部屋に入ったことで住民票を取得することができるようになりました。それはとても大きいことだそうですね。

阪井　住民票があることで、履歴書に住所が書けて仕事を探すことができ、収入を得る道が開けます。更新できなかった運転免許証も、住民票があれば再取得の手続きができるんです。生きるために住民票は必要条件なのです。

山根　そうなのですね。阪井さんは、どんな人に対してもその人の痛みを我が痛みとして感じている。子どものころからそうなのですか。

阪井　祖母がよく「みな自分のことだと思って物事を考えなさい」と言っていたのが、自然に身に付いたのかもしれません。

山根　やっぱり、親や祖父母の生き方って、子どもたちはしっかり見ているのですよね。働くことの尊さもずっと見てこられたし。それで、子育てをしながら宅建業の資格を取られました。不動産業に入ったことが、入居支援活動につながったんですね。

阪井　資格を取って新築物件の管理を少しずつし始めて、そのころに活動のきっかけとなる方と出会いました。それから、精神障害の方が想像を絶する部屋に住んでいるのを知ったとき、「みな同じ人間じゃないか」と、ものすごい憤りを感じて。「どうして今までこのままだったのか、ご本人の権利は誰が守っている」と思って、本格的に支援を始めたのです。

山根　そういう世の中の理不尽って、みんな何かを感じているはずなのに、目をそらして見ないふりをするか、動かないんです。そこが阪井さんのすごいところで、私だってそれを見たら何とかしなくちゃと思うけど、たぶんどう動いていいか分からない。でも、阪井さんはその人たちを助けるためすぐに動いていらっしゃる。

阪井　ただ、私が精神障害の方の支援を始めたことで、娘は4人とも学校の友達にいろいろ言われたようで、「もう、やめて」って泣かれたこともありました。でも「お母さんは、何も悪いことはしていないから」と続けたんです。今はもうみな理解してくれて、年末年始に行っている炊き出しにも協力してくれています。

一生懸命に話を聞けば相手も本音で応えてくれる

阪井　入居支援は、私も仲介料をいただくわけで、ホームレスの方であろうとお客様なんです。ちゃんと商売もしているんです。

山根　一方的なボランティアではないんですね。私はそこもすごいと思う。またそうでなければ活動としても続かないのでしょう。

阪井　ビジネスになっていなければ私の独りよがりになって、後の人に続かないかもしれません。

山根　仕組みを作るということがとても大事なんですね。それでもやはり、阪井さんの人間力がなければこの活動は成り立たないと私は思っています。どうしてみんな「阪井のおばちゃん」って慕ってくると思われますか。

阪井　どうでしょう。ただ、本音でぶつかって、嘘はつきませんね。

山根　でも、本当のことを言っちゃいけないようなときもあるでしょう。

阪井　「おばちゃんはこう思うんだけど、どうだろう？」という言い方はしますね。相手がわがままを過ぎるときは、「それで、よく今まで頑張ってこられたね。みんな離れたでしょう」って（笑）。わがままって病気のせいかもしれないんです。

山根　そうして本音で向き合えば相手も心を開くわね。

阪井　それから私はまず褒めます。きれいな服装をしてこられたら、「そのネクタイ素敵、どこで買ったん」って聞くと、「うん、こないだ大阪行ったとき買ったん」とか、何気ないそんな話からキャッチボールが始まるので。それから、本人の得意なことや、今までどんなことがあったのか聞きます。

山根　阪井さんは精神科のお医者さんも兼ねているわね。今、自分の周りに話を聞いてくれる人がいない方が多いんです。

阪井　私は、相手の顔色が悪ければ本当に心配だし、相手の話は全部聞き逃すまいと思います。特に心の病気の人って、私たちよりずっと気持ちが繊細なので、こちらが一生懸命話を聞いているかどうか伝わるんです。

山根　私も『こころの声を「聴く力」』という本を書いたのですが、今日の阪井さんのお話しには教わることが多く、勉強になりました。本日はありがとうございました。（敬称略）

大切なのはやはり人間力本音で向き合えば相手も心を開きます

皆が一歩踏み出すとき、住みやすい世の中に

阪井さんは住まいの提供だけでなく、皆の話を聞いてあげています。人は悩みや不安を聞いてもらうだけで心が安定するんです。これからの世の中、そんな風にそれぞれが自分の役割に少しプラスして誰かに手を差し伸べるだけで、ずいぶん変わると思うのです。皆がそれぞれの持ち場で自分にできることから一歩踏み出すとき、住みやすい世の中が実現するのではないでしょうか。 ――― 山根基世

グループ社員100名が選んだ シチズン特別賞

2014年度の「シチズン・オブ・ザ・イヤー」は、賞創設25周年を記念して「シチズン特別賞」を設けました。賞の選出にあたっては、シチズングループのなかから選抜した社内選考委員100名による投票を行い、その結果、カンボジアで地雷処理と復興支援活動に取り組む高山良二さんが選出されました。

「シチズン特別賞」
社内選考委員代表
シチズン時計
時計開発事業部 LJP開発部
古内 悠介さん

夢をあきらめない情熱、苦難を乗り越える行動力に感動しました

賞創設25周年を記念した「シチズン特別賞」に選ばせていただいた高山良二さんは、12年余りにわたりカンボジアで地雷処理と復興支援活動に取り組まれています。住民自らの手で復興すれば二度と内戦を起こさないという考えのもと、地雷処理活動を通し経済的に自立できるシステムを作り上げたことは、現地の人たちの信頼がなければできないすばらしいことです。

カンボジアの人たちに本来の笑顔と生活を取り戻すため、平和という夢に向かって活動を続けておられる。その夢をあきらめない情熱、苦難を乗り越える行動力と精神力、現地の人たちに信頼される人間性はとてもまねができません。

また、日本の良さを伝える懸け橋になられていることを思うと、敬意と感謝を込めて応援したい気持ちでいっぱいになり、今回「シチズン特別賞」に選ばせていただきました。

私たちも本業であるものづくりや企業活動を通じ、世界に感動を与えられるような会社になるべく努力を惜しまずに邁進していきたいと思います。私自身、誰かのために生きられるのか、世界平和のために何ができるのかまだ分かりませんが、今後の生き方や将来について深く考えることができました。高山さんを選ばせていただいたことを、誇りに思うとともに、今後ますますのご活躍とご健勝を祈念いたします。

すばらしいスピーチで涙を必死にこらえました

表彰式に参加できて良かったです。すばらしいスピーチで涙を必死にこらえました。ノミネートリストは読んでいくうちにどんどん引き込まれていきましたが、直接お話を聞くとさらに心に響きます。社員参加の選考は、これからも続けてほしいですね！

シチズンマシナリー
（左から）**面川 高大**さん、**尾台 晋**さん
亀村 靖さん、**五十嵐 美貴**さん

突き進むエネルギーに刺激を受けました

表彰式に実際に参加してみて、こんなにもすごい活動をされている人たちがいるのかと驚き、リスクを顧みず突き進むエネルギーに刺激を受けました。また、武田双雲さんの書もすばらしかった。ライブで観ることができて感激です！

シチズンホールディングス
（左から）**仁井田 優作**さん、**三浦 紗葵**さん、**塚田 京子**さん

シチズン特別賞受賞の
高山良二さん（中央）と
社内選考委員

ノミネートされた活動はどれもすばらしかった

ノミネートされた方達の活動はどれもすばらしく、社内選考委員として選ぶのが難しかったですね。また、表彰式でご本人が語られるのを直接聞くと、資料を読んだときの理解がさらに深まり、感動しました。

シチズン電子
武藤 光樹さん

すばらしい活動に改めて感動しました

普段新聞で読んでいても見逃してしまいがちですが、こんなにすばらしい活動をされている方がいるのかと、改めて感動しました。表彰式の会場ではスライドやパネルも見られて、活動の様子がよく伝わりました。

シチズンビジネスエキスパート
（左から）**久米 律子**さん、**後藤 義明**さん
下平 実香さん、**水野 智子**さん

子どもたちからも「ター」と呼ばれ慕われています

地雷原で発見された旧ソ連製PMN対人地雷

高山 良二さん

共に暮らし、共に喜び 平和の種を育てたい

「もう一度、ここに戻ってこよう」
1992年、日本が初めて参加したカンボジアでのPKO（国連平和維持活動）に派遣された高山良二さんは、
半年間の任務を終え帰国の途に就いたとき、
安堵の一方で「もっとできることがあったのでは」という思いにかられ、
機上からカンボジアの大地に再訪を誓ったのです。

「必ず帰ってくる」と、機上から
別れを告げたカンボジアの大地

PKO参加後、10年間持ち続けたカンボジアへの思い

1992年5月、自衛官だった高山良二さんは、所属する施設団がカンボジアに派遣された場合の人員編成案を一晩で作るよう極秘で指令を受けました。これがすべての始まりでした。

施設団は道路や橋を造ったり地雷処理などを行う部隊です。その後、正式に派遣が決まり、10月、高山さんは施設大隊長補佐として83名を率いカンボジアへと飛び立ちました。

カンボジアでは初のPKO参加のため試行錯誤の連続で、英語が得意でなかった高山さんもUNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）司令部との業務調整に奔走。日々大きなやりがいを感じ、現地の子どもたちとの触れ合いに心が和んだそうです。

PKOの先遣隊としてポチェントン空港（現プノンペン国際空港）に降り立った高山さん

半年後、無事任務を終え、一人の欠員もなく日本に帰る日がやってきました。このとき高山さんは、安堵感の一方で「もっとできることがあったのではないか」という思いにかられ、「必ず戻ってこよう」と誓ったのです。

「帰国後もその思いは冷めることなく、むしろ募っていきました」という高山さん。その日に備え、英語塾やパソコン教室に通い、さらに仏教国であるカンボジアへの理解を深めるため奈良東大寺に行き僧侶の資格まで得ました。

帰国から10年が過ぎ、定年退官が近づいたとき、高山さんは自衛官OBがカンボジアで地雷・不発弾処理のNGOを立ち上げようとしていることを知りました。すぐに参加を申し出ると、現地副代表として赴任してほしいという返事。「カンボジアへの思いがピークに達していました」という高山さんは、2002年5月、定年退官からわずか3日後にカンボジアへと飛び立ったのです。

500kg爆弾の不発弾を
発見し爆破処理

国をも動かした、地雷処理への情熱と信念

現地に根ざした「住民参加型地雷処理活動」

高山さんが参加した「JMAS（日本地雷処理を支援する会）」は、自衛官OBの技術を活用し地雷・不発弾処理をするNGOですが、当面の活動は不発弾処理と、不発弾による事故を防ぐための啓蒙活動でした。

2005年12月、高山さんに転機が訪れます。当時の外務副大臣に直接面会し地雷処理活動の必要性を訴える機会を得たのです。年明けには、外務省でNGO支援の予算が検討されて現地調査が行われ、念願の地雷処理活動が実現へと近づきました。そして2006年6月、高山さんは内戦時代の激戦地、タイ国境のタサ

エン村で「住民参加型地雷処理活動」を開始したのです。

この活動は、住民を雇用して地雷処理技術を教え、デマイナー（地雷探知員）となった住民は自らの手で村の地雷を除去し、爆発による被災者を無くすと同時に、安全な土地を取り戻して地域復興につなげます。

活動に先立ちデマイナーを募ると、79名の募集に約200名が応募してきました。高山さんは選考基準として、「家族に被災者がいる」「貧困層」「できるだけ女性を多く」と考えました。応募理由の一番はやはり貧困で、多くの住民が聞くほどに気の毒な境遇にありました。

こうして採用したなかには、自分にできる作業を黙々と行う妊娠中の女性や、40度を超える猛暑のなかで作業を続けて倒れる住民もいましたが、皆、安心して学校や畑や道路が造れる場所になることを夢見て、危険な作業に取り組みました。高山さんも同じ夢を見ながら、「住民自らの手で復興すれば、二度と内戦は起こさない」という信念で村に腰を据え活動しました。

活動開始から半年後の2007年1月、作業中、対戦車地雷の爆発により7名が殉職するという悲しい事故が起きてしまいます。高山さんは「自分の責任」と悔やみますが、その尊い犠牲を平和構築や地域復興につなげるため、住民たちと悲しみを乗り越え活動を再開しました。

高山さんは言います。「私も含め、まず大事なのは、地雷処理を知っている、慣れているという気持ちを捨てること。すべての作業は逃げ腰でいいんです。一にも二にも事故を起こさないことが重要なんです」と。

やむにやまれぬ思いが、いつしか地域の復興支援に

被災の危険を除去するとともに貴重な収入源となるデマイナーの仕事には、男女を問わず数多くの村人が就いています

日本の寄付で完成した道路を自転車で走る村人たち

村人に慕われ、共に一つひとつの課題に取り組む

村に住み、暮らしを共にするなかで、高山さんは地雷処理以外の問題にも取り組むようになりました。そのきっかけについて高山さんは、「赤ちゃんを抱いている女性がいて、生後4日目くらいかと聞いたのです。そうしたら4カ月だという。あまりにも小さな赤ちゃんを見て私はそこを立ち去れませんでした。とにかく、何とかしなければと思いました」と話します。

日本の支援者から寄贈された井戸に喜ぶ住民たち

村に住んでいると、同じように、井戸が足りない、学校が足りない、学校はあっても通う道がないなど、課題がたくさんありました。「復興支援と思って始めたことはありません。やむにやまれぬことが目の前にたくさんあって、それらを一つひとつ村人と一緒に改善してきたことが、結果として復興支援につながったのです」

こうしたなか、「より現地に即した活動に取り組みたい」と、高山さんはJMASを退任し、郷里である愛媛県の支援者と共に2011年7月、NPO法人「IMCCD（国際地雷処理・地域復興支援の会）」を設立しました。JMAS在任中とIMCCD設立後の活動を合わせ、処理した地雷・不発弾は4000個を超え、学校を9校建設、井戸を138基掘削、道路整備が3・5㎞、日本企業誘致が5社、芋焼酎など地場産業の育成、日本への留学など、幅広い活動に成果をあげています（2015年2月末現在）。カンボジアの政府機関や州政府からの信頼も厚く、地雷処理技術顧問や復興担当顧問に任命されています。

その日の地雷処理を終えた後、夕方から日本語教室で教える高山さん

村人から「ター」と慕われている高山さん。「ター」は「おじいさん」という意味で最初は抵抗がありましたが、すっかり定着してしまいました。1年の3分の2はカンボジアで活動し、戦争のない世界という最終目標に向け、高山さんは今日も「平和の種になりたい」と活動を続けています。

高山さんの活動を支えるIMCCD松山事務局のスタッフ

高山 良二さん
たかやま りょうじ
1947（昭和22）年生まれ
カンボジア在住

高山 良二さんによせて

地雷処理というのは想像がつかないほど大変な作業だと思います。その技術をご自身の手で伝え、人を育て、地雷原を畑や学校を作る場所に切り拓いてこられた。「拓」という字は手偏に石と書きますが、まさに手で一つひとつ積み上げ、人々の心も拓いてこられたことを思い、選ばせていただきました。

武田 双雲

CITIZEN OF THE YEAR 1990-2014

受賞者の皆さん

市民に感動を与え、社会の発展に貢献した市民を顕彰して、今年で第25回を迎えたシチズン・オブ・ザ・イヤー。これまでの受賞者の皆さんとその活動をご紹介します。

2014年度

原田 燎太郎さん	過酷な生活を余儀なくされている中国の元ハンセン病患者を支援して10年
本間 錦一さん	水難救助隊長として40年、海の安全を見守る87歳の現役ライフセーバー
阪井 ひとみさん	社会的支援が必要な人たちが地域で暮らし自立できるよう、入居支援を続ける
シチズン特別賞 高山 良二さん	地元の住民たちと共に、カンボジアで地雷処理と復興支援を続ける元自衛官

2013年度

TOY工房どんぐり	障害児のためにオリジナルの布製おもちゃを作り続けて30年
チャイルズエンジェル	子ども達の夢をかなえたいと募金活動に奔走し、動物園にキリンを寄贈
上中別府 チエさん	高齢になってから夜間学校へ通い、勉学や課外活動に熱心に取り組む

2012年度

吉村 隆樹さん	障害者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供
渡辺 玉枝さん	自然体の生き方で、2度のエベレスト女性最高齢登頂記録を達成
ルダシングワ 真美さん	紛争から立ち直ろうとするルワンダで、義肢提供や就労支援に献身

2011年度

税所 篤快さん	バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む
竹内 龍幸さん	盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける
笹原 留似子さん	東日本大震災の被災地で、復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける

2010年度

吉田 守松さん	半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける
吉岡 諒人さん	夏休みの観察・実験を通じ、“アリジゴクは排泄しない”という通説を覆す
樋口 強さん	がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年

2009年度

吉島 美樹子さん	ガン治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている
多以良 泉己さん	リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている
茂 幸雄さん	福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う

2008年度

伊藤 和也さん （故人）	戦禍のアフガニスタンを緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる
川崎個人タクシー協同組合	知的障害施設の子どもたちと行く“タクシードライブ遠足”を30年間継続
出水市立荘中学校	ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀

2007年度

西谷 勲さん	中学の夜間学級に50年間仕送りを続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る
車内清掃を続ける高校生 有志	JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い
谷垣 雄三さん	西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる

2006年度

川越 恒豊さん	刑務所内で放送される人気番組のDJを、27年間で300回以上続ける
桑山 利子さん	スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす
有城 覚さん	交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園

2005年度

堀田 健一さん	障害者一人ひとりのニーズに合わせた自転車を、手作りで26年間作り続ける
吉野 健治郎・勝 親子	親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける
日本スピンドル製造株式会社 社員一同	JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施

2004年度

新宮山彦ぐるーぷ	20年にわたって大峯奥駈道（熊野古道）の南半分約45キロの整備を続ける
兵庫県市町村職員年金者連盟豊岡支部 有志	水没していく観光バスの上で励まし合いながら全員が無事生還
永井 利夫・サヨコ ご夫妻	子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた

2003年度

高松 由美子さん	長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援
遠藤 マルシア アケミさん	お弁当の配達が縁で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校
曽我 健太さん	ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘

2002年度

谷村 基さん	励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける
武井 弥生さん	東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続
アフガニスタン義肢装具支援の会	アフガニスタンの人々のために義肢を製作・進呈

2001年度

伊藤 明彦さん	全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録
大島 誠人さん	自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見
菅谷 昭さん	チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事

2000年度

近藤 原理・美佐子 ご夫妻	障害者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた
ジュンコ アソシエーション	ベトナムの子どもたちの教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続
福祉工房あいち	障害者一人ひとりの障害度に合わせて、補助器具を考案し、製作

1999年度

セイヤー・ミドリさん 与那嶺 政江さん	在日米軍の父と地元女性の間に生まれた子どものために、学校を開設
トーマス・カンサさん	修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2,000台
録音グループ「声」の皆さん	視覚障害者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年

1998年度

岸本 康弘さん	ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む
金子 聡美さん 安田 志津さん	ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車で日本列島を縦断
「福祉ネットワーク池袋本町」の皆さん	電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る

1997年度

葛木 みどりさん	南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現
高澤 圭介・ナミ子 ご夫妻	私財を投じてお年寄りや障害者が気軽に立ち寄れる家を完成
愛知県立東山工業高等学校 車いす部	高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈

1996年度

小山 道夫さん	ベトナムの子どもたちのため、職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設
福岡 明夫さん	自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録
古川 ヨシさん	障害者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師

1995年度

川田 龍平さん	命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身
木村 三男さん	濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出
神戸商船大学「白鴎寮」自治会	阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出動

1994年度

星野 勇・シズエ ご夫妻	足の不自由な方のために1,000足を超える靴を無償で修理・改良
山下 秀治さん	知的障害者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築
森本 春子さん	山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける

1993年度

宇佐美 松恵さん	1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る
佐藤 昭夫さん	パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年
8/6 竜ケ水駅災害救助活動グループ	土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助

1992年度

清水 ルイーズさん	日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている
干川 文次さん	絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元
『雄冬新聞』歴代編集長	地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー

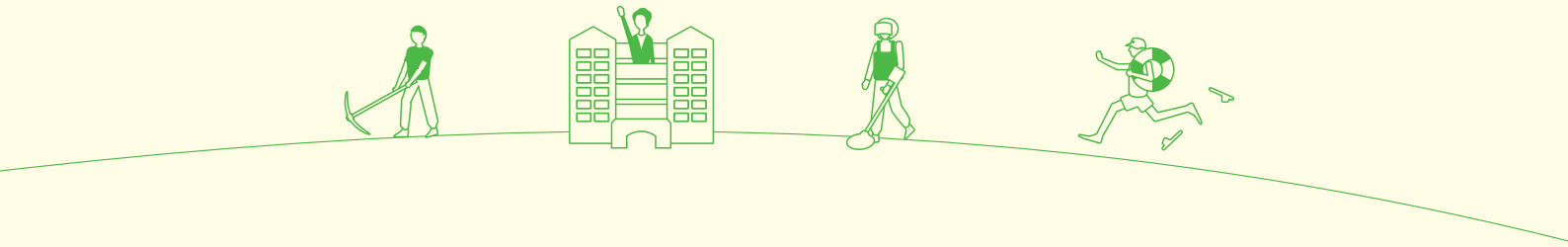
1991年度

チョン・キューキョンさん	長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ
馬場 国敏さん	湾岸戦争で原油汚染にあえぐ野鳥を救うため、国を動かし現地で活動
十円会	月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献

1990年度

加藤 幸男さん	バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助
鈴木 陽子さん	過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動
林 錬友さん	使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付

CITIZEN
Micro HumanTech



シチズンホールディングス株式会社

〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12
TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280
http://www.citizen.co.jp/coy/index.html

CITIZENはシチズンホールディングス株式会社の登録商標です。

2015年6月発行